炭焼き長者

むかしあるところに、わんずかだ村っこあったわけだ。そこに炭焼きして暮らしたわけだ。で、ある家に、男三人の兄弟いて、冬になれば雪にかって、炭焼いたやづ、持ってこらいねっために、その炭焼き小屋さ泊まってはぁ、炭たまればそりで運んだもんだど。ある時兄、炭焼きにいったわけだ。焼き飯背負って、いっぱいお饅頭背負ってまんず行ったわけだ。木とっ

て、釜さかけて、火つけて、泊まっているために、そさ寝たわけだ。今みたいに布団もねし、よぼしまってば、ほどかためた、布団の代わり持って行って、泊まったわけだねぇ。夜さなって、「おぶってけれでぇぁ、おぶってけれでぇぁ」って叫ぶわけだ。「なんだもんだべぎゃぁ。おぶってけれってば」って。だんだん来るいんだって。なんだって寂しねし、兄、夜逃げで来たわけだ、藪こいで。「うがだしぇ、こんだものおぶってけれって言うったて、とてもおっかねして、おぶらいねして逃げで来たでぇぃ」って言ったわけだ。二番目のおんじまだ、「なんに、むじなだ、狐だでば、オレいぐでぇぁ」って、また行ったわけだ。やっぱり今度も藪こいで行ったど。兄、炭小屋さ行って、また木取って炭焼いて、炭あげて寝たわけだ。まんだそれ、「おぶってけれでぇぁ。おぶってけれでぇぁ」ってくるわけだ。兄しゃべるとおりだなぁって、「わい、さびししてとてもいらいねでぇぁ」って、おんじもまた逃げてきたわけだ。「やっぱりしゃぁ、あいだばさびしして、いらんねもんなぁ」って。今度、三番目、三郎ってやつ、まだ、「んがらだだ、なんにほらぁ、おっかねってやぁ。おぶってけれってば、おぶえばえんでねぇ」って言ったば、「オレ行ぐぁい」って、三番目いったわけだ。やっぱり炭さ火付けて、まま喰って夜寝たわけだ。したば、まんだほれ「おぶってけれでぇぁ。おぶってけれでぇぁ」って、ずっと遠くからさかぶどぉ。だんーだんに近けぐなってきて、やんね叫びするわけだぁ。「なんだべぎゃぁ。おぶってけれってば、オレおぶうでぇ。来い、こい」って言ったわけだ。したば、ずっと小屋のそばまで来て、わらで編んだ菰吊したもんだべし、その菰はんで、入ってきたわけだ。真っ白だババ、体も髪も顔も真っ白だ、きれーだ婆来たわけだ。「婆、んがだなぁ。どこまでおぶってげばやったが」って言ったど。「あのひゃぁー、オメの家までおぶってけれ」って言うわけだ。「んだってなぁ」って、「なんとこの冬どうへばこれ」って。「ええじゃぁ。おぶってけれ」って。その子供、三郎おんじまんだ、婆どごたないで、おぶって、藪こいで、家さ来たわけだ。なんぼが重てがったんだんだら、休み休みやっと家さ届いたど。「わい、やっと家さとじぃたでぇぁ」って。昔は庭広かったために、その庭さ、「わい、おぼてでぁぃ」って、ドンとおろしたど。したば、ままんで炭がいっぺは、金だやら宝物、いっぺいなったわけだ。それ、神様であったたい、ほれぇ。そいで、そこの家で大繁昌したわけ。それで、とっぴんぱらり。

野村セツ（檜山　94歳）

よぼしま＝夜業。草・海草・ぼろなどで作った夜具。
ぼど＝農村の作業衣。使い古した衣服。

〈解説〉

長者物語にはさまざまな形式があるが、これもそのひとつ。ここでは長男・次男が忌避した怖いことを、三男が引き受けて長者になった。全身が白い化け物は神の化身で、三男の勇気と努力に報いて黄金を授けた。「蛇婿入り」の場合、長女・次女が忌避したことを、三女が引

き受けるという筋書きと似通っているし、優しさ・勇気・大胆・努力が報いられる「七つの宝蔵」などとも似通っている。